令和５年４月１日（毎月１回１日）発行　　昭和43年１月10日第３種郵便物認可

MICHISHIRUBE

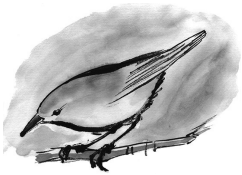
みちしるべ

No.893

2023
4
April

みちしるべ

Issue of April 2023
MICHISHIRUBE No.893



Contents

切ない現実／杉江和彦 3

人生の GPS ／小林　実 4

詩　ご心配なく／ M・中野 7

この意味教えて（カタカナ篇）
No.16　バプテスマ／広沢　規 8

私たちと聖書
No.81　ペットロボットと聖書／峰本義明 10

本当の R.I.P. ／広本研一 12

☆当月号および過去 1 年分のみちしるべを、電子書籍版にてご覧頂けます。　https://e-michishirube.com

表紙写真：菜の花

切ない現実

杉江和彦

以前、忘れられない出来事に遭遇したことがあります。車で街を走っていると、車道の中央分離帯にひとりの人が立っていました。横断歩道がない所を無理に渡ろうとして、中央分離帯で立ち往生してしまったという感じです。運転中にそういう人に出くわすことは珍しくありません。

しかし、その時は少し様子が違っていました。その方は、80歳くらいのご婦人だったのですが、なんとパジャマ姿だったのです。私はすぐに「徘徊」という単語が頭に浮かびました。このまま放っておく訳には行きません。車を安全なところに停めて、取る物もとりあえず、その女性を助けに行きました。

一一〇番すると、警察がすぐに来てくれました。ご婦人は、とても優しそうな上品な雰囲気でした。小さな鞄をお持ちで、その中にアドレス帳が入っていました。身元確認のため、警察がそのアドレス帳を開くと、私にもその中が少し見えました。そこには、英語がびっしりと書かれていました。イギリスの有名な大学名も書かれていました。

やがて息子さんが迎えに来られ、その件は無事に解決したものの、その女性の詳しい素性は分からずじまいでした。ただ英語が堪能なようなので、現役時代に、その英語を駆使するようなお仕事をされていたのかもしれません。あるいは留学や渡航の経験もあったかもしれません。想像は膨らみます。しかし、若い時にどんなに優秀であったとしても、老いと共にその能力が失われていくという現実に、私は帰路につきながら、「切なさ」を感じました。そして次の聖書の一節が頭に浮かびました。

「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。」

（伝道者の書12章1節）

読者の皆さん。明日よりも今日のほうが、あなたは若いです。どうか、今日という若い日に、真剣に創造者（神様）のことを考えて下さい。

人生のGPS

小林　実

地域によっては冠雪も溶け、野へ山へと出かけたい季節になりました。コロナの影響もあって山に登る方々が急激に増えたそうです。行楽地や都会は人の賑わいがありますが、近隣の低山なら〝賑わう〟という心配もありません。

もう一つ、登山人気を支えているのはGPS（全地球測位システム）機能付きソフトの普及です。このソフトの活用により、初めての山でも一人で登ることが可能となりました。私もその恩恵を受けている一人ですが、具体的な機能として、左記のものがスマホの画面に表示されるのです。

一、目的地
二、ルート
三、自分の居場所

最も基本的かつ重要なことですね。でもこの三要素が重要なのは、山登りに限ったことではありません。日々のショッピングや観光旅行、ビジネスでの出張等、様々な場面で、私達は無意識にこの三要素を脳裏に描いて、歩を進めているのではないでしょうか。

ところが私たちの「人生」という最も大切な旅程においては、意外とこれら三要素が曖昧なのではないでしょうか。そこで今回これらのことを、人生という観点から考えたいと思います。

一、目的地

そもそも私たちは出生の場所、時期、性別、すべて自分で選んだ訳ではありません。気づいたら自分は人間として生まれていたわけです。言わば大海に漂流する難船のような状況下で人生のスタートを切ったようなものです。そんな私たちに「人生の目的地」って問われても困りますね。

つまり人生とは、自分で得たものではなく、与えられたもの、と言えます。「生命」も「人生」も与えられたものです。だとすれば、与えてくださった方に尋ねなければ「本当の目的地」は見えてこないのです。

では、その与えてくださった方とは誰でしょう。それが創造主、すなわち神なのです。

二、ルート

私たちは目的地も分からず漂流していても、何となく取るべき航路が見えてきたような気になります。能力に応じて「エリートコース」「準エリートコース」といったコンベアにのせられ、教育や技能といった付加価値を身に付けます。付加価値が高ければそれだけ高額で取引され社会にも貢献できます。でもそれは航路と言うよりも、社会の仕組みの中で這い上がるためにもがいている、と言った方が良いかもしれません。

けれども社会は冷酷です。いかに優秀な人材でも、消費しきってしまえば、それまでの付加価値の高低に関係なく「無用な物」と見なされてしまいます。またそこに至る前に、幸せと呼べる家庭を築けず「どこで踏み間違えたのか」と自分の人生を回顧する方も多くおられます。そのような方は「努力して『狭い門』をくぐってきたつもりだ」と口にするかもしれません。

この「狭い門」は、聖書由来の言葉でありますが、現代では、受験生を鼓舞して難関大学や資格試験に挑め、といった意味に用いられます。しかしその場合、中に入れる人（定員数）が少ないだけで、多くの人から注目され、その価値を認められているという意味からすれば、むしろ「広い門」なのかもしれません。聖書で言う「狭い門」は、門の向こう側（天国）は広くて、誰もが入れるのに、その門自体が小

さいために、多くの人が気づかず、目を留めようとしないため、結果として狭くなってしまうわけです。

三、自分の居場所

十九世紀のフランスの画家、ポール・ゴーギャンは「我々は何処から来たのか　我々は何者か　我々は何処へ行くのか」というタイトルの絵を描きました。（下図）

印象派以後、それまでの型にはまった作品から解放され、自分なりの表現を確立したかに見えたゴーギャンですが、母国での家庭は破綻し、この作品も含む、数々の名作が生み出されることとなったタヒチ島での生活も荒れることが多く、最期は一人寂しく亡くなっていったようです。多くの芸術家と同様、彼も自身の人生については道を見出せなかったようですね。

神は最初の人アダムにこう語りかけました。

「あなたはどこにいるのか。」（創世記3章9節）

このことばは自分の居場所が分からない私たち全員に対する神の呼びかけでもあります。そして迷った私たちにイエス様は次のように語っておられます。

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」（ヨハネの福音書14章6節）

いずこに迷いこんだとしてもそこに道は示されています。主イエス様に目を向けるならば、そこが再出発の道となります。

人生の目的地は、あなたに生命を与えてくださった父、すなわち神様のみもとに帰ることです。この小冊子のタイトルは「みちしるべ（道標）」です。是非、これらを毎月お読みになって、ご自身の人生の道標となさってください。

ご心配なく

M・中野

自分みたいなのが
救いがあるのだろうかと思うなら
ご心配なく！

聖書に登場する人々は
りっぱな人は　たくさんいますけど
むしろ　そんな人の方が少ないのです
貧しくて　悲しくて　悩み多くて
欠点の多い人が多いのです

そして
神さまの救いは
そのような人にさしのべられているのです

心配しないで
イエスさまのところに行って
救いを得てください

この意味教えて ―カタカナ篇―

No.16 ● バプテスマ

広沢　規（のり）

バプテスマとは「洗礼」のことです。バプテスマは「主イエスは救い主である」と信仰を言い表した人に行う儀式です。その人は、介添え者の助けによって、水の中に全身を沈めていただき、再び水の中から出していただきます。このような一連の行為であるバプテスマは、洗礼というよりは「浸礼」と言った方が、その意味をより正しく伝えます。

また、洗礼というと、バプテスマの儀式そのものが、その人の罪を洗い流すという印象を与えてしまいます。このような内容も含めてかもしれませんが、明治以来、日本語に翻訳された日本聖書協会の「文語訳聖書」も「口語訳聖書」も、さらに日本聖書刊行会の「新改訳聖書」も、バプテスマという言葉は、洗礼という訳語ではなく、そのまま原語で表記されています。

復活された主イエスは、弟子たちの前に顕現されて、このように命じられました。

「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け…なさい。」

（マタイの福音書28章19節）

初代のクリスチャンは、この主イエスの命令に従って、信仰を言い表した人にバプテスマを施しました。そして、今日もバプテスマは継承されています。

バプテスマは、その儀式を通して、主イエスを信じた人が主イエスと一つに結ばれたことを意味します。すなわち、水の中に沈むことによって、古い私は主イエスとともに死に、ともに埋葬されたことを示します。さらに水の中から出ることによって、主イエスとともに新しいいのちに復活したことを表します。（ローマ人への手紙6章3、4節参照）

主イエスを受け入れた人は、だれでも神の子どもとされます。神は、神の子どもたちが一人で歩むのではなく、主イエスの御名のもとに集まって、いっしょに行動することを望んでおられます。それで、バプテスマを受けた人は、地域集会の交わりに加わることになります。

読者の皆さま、まず、「主イエスの十字架の死と埋葬と三日目のよみがえりは、罪深い者が救われるために、神によって行われた愛のみわざであった」と確信してください。次に、バプテスマを受ける決心をしてください。さらに、バプテスマを受ける決心が着いたならば、集会の長老に「バプテスマを受けます」と意思表示してください。長老たちは適切な助言と信仰確認をしてくれます。その結果、「父と子と聖霊の御名によるバプテスマ」または「イエス・キリストの御名によるバプテスマ」を受けることになります。

聖書が伝える救いは、ただ神の恵みとイエス・キリストの血による贖（あがな）いによります。この救いは、ただ信仰によって受けるのであって、善行や儀式によってではありません。救われるためにバプテスマを受けるのではなく、信仰告白をした人がバプテスマを受けます。**「彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。」（使徒の働き2章41節）**と記されています。主イエスに従う決心をして、バプテスマを受けて、どうか信仰生活の第一歩を踏み出してください。

No.81

ペットロボットと聖書

峰本義明

一、お別れのないペット

先日、ある広告が目につきました。ペットロボットを紹介するものでした。ある企業がＡＩ（人工知能）や最先端テクノロジーを取り入れたロボットを開発しました。このペットロボットは少し大きめの猫ほどの体格をしています。多くのセンサーと高性能パソコンを内蔵しており、「飼い主」の声に振り向いてしっかり目を見つめ返したり、「飼い主」の「お世話」に応じた表情や行動をしたりするそうです。

このペットロボット自体はともかく、私が関心を持ったのは、このロボットの開発動機の一つが「お別れがつらくてペットを飼えないと思っていた方のため」だったことです。もちろん、この思いは理解できますが、果たしてペットとのお別れ、すなわち死は「つらい」だけのものでしょうか。

二、不老不死は幸福か？

死のない世界とは今の世界が永遠に続くことです。しかし、例えば世界ではウクライナでの戦争が続いています。多くの人が意味もなく殺され、酷い仕打ちを受けています。人の欲望が引き起こす悲惨

な出来事が止むことなく起きる世界、それが永遠に続くのです。そんな世界は本当に幸福でしょうか。

「神である主はこう言われた。『見よ。人はわれわれのうちのひとりのようになり、善悪を知るようになった。今、人がその手を伸ばして、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きることがないようにしよう。』神である主は、人をエデンの園から追い出し、人が自分が取り出された大地を耕すようにされた。」

（創世記3章22、23節）

これは俗に「失楽園」と言われる箇所ですが、アダムとエバがエデンの園から追い出された理由は人が「永遠に生きることがないように」でした。私はこれを理解できます。私たちの世界がこのように苦しみが続くのは「罪」が入ってきたからです。その罪に支配されている人々が永遠に生きて作る世界は、決して平和であることがなく、「天国」よりもむしろ「地獄」に近いように思えるのです。

三、罪の解決

神様はそのご栄光を表すために、またご自身の愛の対象として、世界と人をお造りになりました。それなのに人は神様から離れ、神様を無視しています。造られた本来の目的から外れた使い方をすれば、不具合が起きるのは必然です。聖書は人の姿をこう告げます。

「義人はいない。一人もいない。…すべての者が離れて行き、だれもかれもが無用の者となった。」

（ローマ人への手紙3章10～12節）

ですから、まずあなたが第一にすべきことは「罪の解決」です。自分が神様から離れている状態であることを認め、神様に立ち返り、イエス・キリストを救い主と信じ認めることが必要です。そうすることで、罪が赦されるだけでなく、永遠のいのちを手に入れることができるのです。

「罪の報酬は死です。しかし神の賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」

（同6章23節）

4月になり新たな年度を迎えます。様々なことが改まる今、あなたの新たな人生のスタートを図るよう、ぜひ考えてください。

本当のR.I.P.

広本研一

世界で知られているような著名な方が亡くなったとき、海外からのネット記事への反応に、「R.I.P.」と書かれてあるのをよく目にします。

何だろうと思って調べて見ますと、元はラテン語の「requiescat in pace」、英語では「rest in peace」の略語で、「安らかにお眠りください」という弔意を表しているそうです。日本の「ご冥福をお祈りします」に近いニュアンスでしょうか。亡くなった人との関係性の近い遠いにかかわらず、人の死を悼み、その方の死後の幸福を願う気持ちは万国共通であり、尊いものです。

しかし、その方が安らかに眠ることができるという保証は、だれも持っていないのではないでしょうか。実際のところ、私たちの死後はどうなっているのでしょうか？

「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」（ヘブル人への手紙9章27節）

聖書はこのように厳粛なことを告げています。つまり私たちは死後、神様の前に立ち、生前に行ってきたすべてのことについて、公正なさばきを受けなければならな

いのです。
ですから、少しでも悪い所、すなわち罪のある者は、残念ながら天国に入ることはできません。それどころかその罪の刑罰を受けて、永遠の苦しみの場所に行かなければならないのです。
そして私たちが天国に入るための条件は、ただ一つです。聖なる神様の前に完全に義（正しい）と認められることです。

私の場合、聖書に出会う前には、自分が罪人であるという自覚はありませんでした。品行方正な人間でないということは十分承知していましたが、それも人並みのレベルであろうと考えていたのです。
しかし私は、聖書によって造り主なるまことの神様の存在を初めて知り、自分のそれまでの人生がこの方をまったく無視して、自分勝手に生きてきたものであることを知らされました。そして自分の心の中には、とても聖なる神様にはお見せすることができない、汚れた思いがあることを痛感させられました。私はそのことが分かった時、自分は天国に入ることは到底できない存在であることを理解したのです。
これは私だけでなく、皆さん一人ひとりも同様であります。造り主である神様は、あなたのこれまでの人生の歩みも、そしてあなたの心の中にあるものも、ことごとくご存じです。

ところが驚くべきことに、神様は私たちすべてが義（正しい）と認められる道を備えてくださいました。それが主イエス・キリストの十字架です。本来、私たちが受けるべき神のさばきを、今から2千年前、罪のない神の御子イエス様が代わって受けてくださったのです。

「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです。」（ローマ人への手紙3章23、24節）

このようにイエス様を自分の救い主と信じることによって、だれでも無代価でこの義をいただくことができます。何というすばらしい約束でしょうか！これは神様の、そしてイエス様の私たちに対する限りない愛の表れに他なりません。

私は自分が天国に入ることができない存在であると知って絶望しましたが、イエス様の十字架の死と復活が私のためであったことを知り、私のような者に対する計り知れない恵みと愛に心から感謝することができました。そしてイエス様を私の救い主と信じることができたのです。

聖書の神様は、私たち一人ひとりを造り、いのちを与えてくださった造り主です。そして何よりも私たちのことを心から愛してくださるお方です。死後、私たちがその方の元に帰ることで、本当の安らぎを得ることができるのです。

「見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」

（ヨハネの黙示録21章3、4節）。

これが、聖書が語る天国の様子です。ここに本当の安らぎがあります。人がこの世でどれほどの悲

しみ、苦しみを経験したとしても、神ご自身がその目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる場所、それが天国です。

先日、ある高齢の方の葬儀に出席しました。その方は集会に来られたことはなかったのですが、クリスチャンである娘さんから自分の罪について教えられ、イエス・キリストが自分のために十字架で死なれ、復活されたことを聞いて、それを信じられたのです。病床の中でも娘さんと一緒に聖書のみことばを読み、賛美歌を歌い、平安の内に地上の生涯を終えられました。

簡素な葬儀でしたが、そこには本当のR.I.P.がありました。娘さんはもとより、出席したクリスチャンすべてが、その方が今はイエス様のもとにあって、あらゆる悲しみ、苦しみから解き放たれ、真の安らぎを得ておられることを確信することができました。

皆さん、今のままでは決してだれも天国に入ることはできません。しかし、神様はイエス様を信じる信仰によって私たちを義と認め、天国で真の安らぎを得る道を設けてくださったのです。どうか本当のR.I.P.をご自分のものとされますように、心からお勧めいたします。

みちしるべ４月号　第893号
令和５年4月1日（毎月１回１日）発行
発行所　伝道出版社
〒183-0056　東京都府中市寿町 2-8-9
TEL 042-366-7760
FAX 042-366-7790
編集人　伝道出版社　編集部
https://dendoshuppan.shop-pro.jp/
印刷所　株式会社　共同印刷所

昭和43年1月10日第3種郵便物認可
令和5年4月1日（毎月1回1日）発行
みちしるべ4月号　第893号
伝道出版社
〒183-0056 東京都府中市寿町2-8-9
定価1部 50円＋税　送料63円
振替00140-9-27336

Column

人生は出会いで決まる

出会いと別れの多いこの季節、読者の皆様の生活にはどのような変化がありましたか。出会いは、良くも悪くも人生を左右するものです。「人生は出会いで決まる」と言われるように、振り返ると誰しも「あの人との出会いがなければ今の自分はいない」という出会いがあるのではないでしょうか。

私たちが生まれて初めに出会う人は家族です。そして、学校や職場の人たちとの出会いがあります。多くの出会いは、偶然の出来事のように思われるかもしれません。しかし、求めれば誰でも必ず与えられる出会いがあります。それは、私たちのことを、いのちを捨てるほど愛してくださるお方、イエス・キリストとの出会いです。

「イエス・キリストは、昨日も今日も、とこしえに変わることがありません。」（ヘブル人への手紙 13 章 8 節）

私たちがどんな過去をもっていても、どんな弱さを抱えていても、キリストは変わることなく私たちのことを愛してくださるのです。キリストと出会い、キリストの愛を受け取ると、生き方が変わります。かつては愛せなかった人を愛し、赦せなかった人を赦すことができるようになるのです。この素晴らしい出会いが読者の皆様にもありますように。

（福井 雄一）

なお、くわしく聖書について知るために、下記の所へぜひおいでください。